

アメリカ人留学生のソーシャル・ネットワークとホストとの親密化 — 支援制度による接触を中心に —

村上 律子

1. はじめに

文部科学省の推進してきた留学生 10 万人計画が 21 世紀に入ってその目標値に達し、留学生の出身国や留学目的、留学の期間は多様化し、留学生のステイタスも多様化してきた。大学の学部生、大学院生、研究生、進学を希望する留学生、交換留学生、短期留学生などさまざまな留学生が、目的を異にして同じ大学で学んでいる状況がある。留学生センターや留学生別科でも、多様なステイタスを持った留学生が混在し、多国籍多学籍の混成クラスが存在する。

神田外語大学留学生別科では進学希望の私費留学生、大学間国際交流協定に基づいた交換留学生、全米大学連盟からの短期留学生を合わせて約 100 名の留学生が学んでいる。留学生の出身国は、中国、台湾、韓国、ベトナム、タイ、インドネシア等のアジア圏と、アメリカ、ニュージーランド、デンマーク、フィンランド、イタリア等の欧米圏と多岐に渡っており、それぞれの言語を学習する日本人学部生もキャンパスに存在することから、多言語多文化交流の環境が整備されていると言える（長田 2003）。

留学生は来日して知り合いがほとんどいない状態から周りの人間と接触してネットワークを構築していく。このようなネットワークのことをソーシャル・ネットワークと言う（田中 2000）。このネットワークは国籍の違いによりホスト国の人（以下ホスト）、同じ国や地域の出身者（以下同国人）、他の国の出身者（以下他国人）という 3 つのネットワークに分類され、その機能やそこから受けるサポートなどの観点から比較分析されてきた。外語大学という比較的恵まれた多文化環境の中で、留学生はどのようなソーシャル・ネットワークを構築しているのだろうか。

留学生の対人関係形成に関する研究では、留学生はホストとの交流が少なく、同国人とのつながりが強いことが指摘されてきた（Bochner et al, 1977, Furnham & Alibhai, 1985, Furnham & Bochner, 1985）。一方日本の留学生を対象とした研究では、ホストとの関係はネットワークの半数を占めており、サポート提供者として大きい存在感をもっていると言う（田中 2000）。また日本では留学生の出身地域によってホストとの関係が異なり、アジア圏の留学生より欧米圏の留学生のほうがホストとの結び付きが強いという報告もある（横田・田中 1992）。このように留学生とホストとの関係は、留学生が居住する国や多様化した留学生の属性を無視して論じることが難しくなっていることが窺われる。

またたとえ留学生とホストとの交流が数量的に多く見られたとしても、その関係が表面的なものに留まっていたら留学生の本当の意味での適応には繋がらないであろう。横田（1991 b）の留学生と日本人学生の親密化に関する研究によると、留学生と日本人学生の友人関係よりも、留学生同士、日本人同士のほうがより親密であると言う。親密化を阻む要因についての留学生、日本人それぞれの答えには食い違いが見られ、両者の認識からも

その親密化は難しいことが想像される。本学で留学生に提供されている支援制度は両者の親密化にどのように貢献しているのだろうか。

本研究では調査対象を別科留学生の中で最も数の多いアメリカ人（短期留学生および交換留学生）に絞り、彼らが日本で構築しているソーシャル・ネットワークの国籍別構成を明らかにする。そして日本では結び付きが強いと言われるホストとの関係がどのように親密化しているのかを、支援制度による接触を中心に明らかにする。

2. 先行研究

2. 1 ソーシャル・ネットワーク

留学生のソーシャル・ネットワークに関する研究では、Bochner, Mcleod & Lin (1977) が「友人ネットワークの機能モデル (The functional model of the friendship network)」を提唱し、その仮説が欧米圏において検証され支持されてきた (Furnham & Bochner, 1982, Furnham & Alibhai, 1985)。友人ネットワークの機能モデルとは、留学生の友人が果たす機能がその友人の出身国（地域）によって分化されるという仮説である。Bochner et al (1977) ではハワイ大学のアジア系寮生を対象に調査を行い、友人の国籍によって 3 つのタイプのネットワークがあり、それぞれが異なる機能を持つことを明らかにした。第 1 のネットワークは同国人で、自文化の価値観を共有する機能を持つ。第 2 のネットワークはホストの学生で、学業上の課題達成をサポートする機能を持つ。第 3 のネットワークは他国からの留学生で、レクリエーション上のつきあいの機能を持つ。これらのネットワークの中では同国人との繋がりがもっとも強く、次いでホストの学生との繋がりが、そして他国からの留学生との繋がりがもっとも弱い。また留学生支援を考える上で、ホストとの繋がりは道具的な機能を越えた交流を目指すべきであることが示唆されている。

欧米圏で検証されてきた機能モデルを、横田・田中 (1992) では日本の留学生を対象に、一般の大学寮・留学生会館・アパートの 3 タイプの居住形態別に検証している。先行研究との比較では、同国人と日本人へ友人が 2 極分化していく傾向や、アジア圏の留学生より欧米圏の留学生のほうがホストとの結び付きが強いことが指摘されている。また居住形態別の特徴として、日本人との混住形態である寮の学生は日本人との結び付きが強く、留学生だけが居住する会館の学生・アパート生は同国人との結び付きが強いことがわかった。混住寮は一方で日本人との関係においてストレスの高い環境ではあるが、その一方で日本人との友人関係が形成されやすい形態であり、現在の留学生会館における分離主義を改め、ホストと留学生が混住する統合主義的な配慮が必要であることが示唆されている。

これまでの研究はネットワークの構成員を友人のみに絞っていたが、田中 (2000) では学内の教職員や学外の友人、ホストファミリー、親戚や家族などを含んだより幅広い対象に広げ、留学生のソーシャル・サポート・ネットワークの構造を明らかにしている。その結果、ホストがネットワークの半数を占めていることがわかった。また学内者は道具的な学業サポートを、学外者は情緒的なサポートを提供していることが示唆され、学内に限らない広いネットワークを開拓できるかどうかは留学生の適応に重要な影響を与えることが示唆されている。

以上の点を踏まえ、本研究ではアンケート調査によりアメリカ人留学生のソーシャル・

ネットワークを学内外に範囲を広げて調査する。まずネットワークがホスト、同国人、他国人という国籍別にどのような割合で構成されているかを検証する。そして留学生の居住形態がどのように国籍別構成に影響しているかを検証する。また留学生に対するサポートについては、親密化に関するインタビュー調査で言及する。

2. 2 親密化

横田 (1991b) は留学生の中でがホスト国の学生と親しい関係を持つ者は僅かであるという Bochner et al, (1985) や Furnham & Alibhai, (1985) の調査結果を受けて、留学生と日本人学生との親密度と、その親密化を妨げる原因について調査している。調査から留学生とホストとの友人関係は留学生同士と比べた場合明らかに少ないこと、「かなり仲がよい」以上に親密になる割合も留学生同士のほうが圧倒的に高いことなどがわかった。そして両者の親密化を妨げる要因を留学生に聞いたところ、「日本の習慣」、「言葉の障害」、日本人が留学生との友人関係に興味がないと感じる「関係づくりへの抵抗感」、留学生が日本人学生に興味がない「興味なし余裕なし」、日本人学生は主張が希薄でおもしろくないという「希薄な主張」などの要因が抽出された。

また友人関係形成初期に日本人は留学生と接触することに緊張感を覚えるため、集団行動によってその緊張を低減しており、個人的に関係を作っていく留学生との間にアプローチの違いが見られるという。

このような留学生とホストとの親密化を妨げる原因を参考にしつつ、本研究ではホストとの繋がりが比較的強いと言われる欧米出身のアメリカ人留学生が、ホストとどの程度親密な関係を形成しているのかをインタビューデータによる質的研究から明らかにする。また本学の支援活動による親密化への影響を検証するため、調査対象者が経験した支援活動 (E-pal、チューター、Language Exchange) の中で接触した学生との関係を中心に分析する。

3. 研究方法

3. 1 調査対象者

調査はアメリカ国籍の短期留学生および交換留学生を対象とする。短期留学生はアメリカの大学連盟と提携した NPO による留学プログラムにより 1 学期間¹滞在し、総数は毎学期約 50 名前後である。交換留学生は大学間国際交流協定により 1 年間滞在し、アメリカか

表 1 調査対象者の属性

	A	B	C	D	E	F	G
ステイタス	短期	短期	短期	短期	短期	交換	交換
性別	男性	男性	男性	女性	女性	男性	女性
居住形態	ホーム ステイ	ホーム ステイ	ホーム ステイ	寮	ホーム ステイ	寮	寮

¹ 学生の中には 2 学期間滞在する者もいる。

らは毎年約5名が来日する。今回の調査の対象となる学生は7名で、内訳は短期留学生が5名、交換留学生が2名である。性別は男性4名、女性3名である。居住形態は寮が3名、ホームステイが4名である。全員が年齢は20代前半、日本語能力は初級レベル、母語は英語、母国では大学の学部には所属している。

3. 2 調査方法

調査は質問紙によるアンケート調査と、半構造化インタビューで行なわれた。調査対象者はソーシャル・ネットワークについてのアンケート用紙を事前に配布され、インタビューの前に記入を済ませた。調査者は記入された質問紙を見ながら、対象者とネットワーク構成員との関係についての質問を中心に、対象者の答えに沿って適宜質問内容を変えながらインタビューを行なった。インタビューの時間は1人30分である。アンケート調査とインタビュー調査には英語を使用した。

アンケート調査の質問紙は田中（2000、204頁）のソーシャル・サポート・ネットワークの調査で用いられたもの（英語版）を使用した。質問内容は、日本で関わりのある大切な人を10人挙げて、その年齢、性別、国籍、本人との関係、サポートの種類、満足度、依存度、接触頻度を聞くものである。

3. 3 留学生支援制度

調査対象者のアメリカ人留学生が利用可能な留学生支援制度を説明しておく。短期留学生には新生活支援のE-pal、学習支援のチューターが希望者に紹介される。交換留学生には新生活支援のバディ、学習支援のチューターが希望者に紹介される。また留学生は誰でもLanguage Exchangeという語学の相互学習のシステムを利用できる。これはSALC（Self-Access Learning Center）と呼ばれる自律学習センターで提供される学習支援で、ホスト学生と留学生が掲示板を利用してお互いの学習言語で話すパートナーを探すシステムである。

3. 4 分析方法

アンケート調査は国籍別に性別、年齢、本人との関係、依存度、接触頻度とクロス集計を行なった。満足度は4段階評価の最高値を+2、最低値を-2として平均値を出した。

インタビュー調査は音声データを日本語に翻訳しながら文字化し、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによって分析した。その分析方法は、まずデータをよく読み込んで親密化に関連する部分を切り出し、国籍別に分けたあと概念を生成していく。1つの概念は包括的な関係でグルーピングされたデータを集めて生成され、命名される。これをオープンコーディングと呼ぶ。次に概念と概念との関係を検討し、包括するカテゴリーを生成していく。そしてカテゴリー間の関連性や中心となるカテゴリー（コア・カテゴリー）を検討し、親密化のプロセスを説明する結果図にまとめた。

4. 結果と考察

4. 1 アメリカ人留学生のソーシャル・ネットワーク

アンケート調査のデータをクロス集計し、表 2 のような結果が得られた。

表 2 国籍別にみたネットワーク構成員の特徴

		同国人	他国人	ホスト	計
国籍		22	5	28	55
		40.0%	9.1%	50.9%	100.0%
性別	男性	15	1	9	25
	女性	7	4	19	30
年齢	19 歳以下	2	0	6	8
	20 代	20	5	13	38
	30 代	0	0	5	5
	40 代以上	0	0	4	4
関係	教師	0	0	3	3
	研究室の人	0	0	0	0
	チューター	0	0	2	2
	大学職員	0	0	1	1
	学生	13	1	9	23
	ホストファミリー	0	0	7	7
	家族	0	0	0	0
	親戚	0	0	0	0
	友人	9	4	6	19
満足度		1.86	1.20	1.57	1.65
依存度	頼る	0	0	14	14
	同じ	21	5	13	39
	頼られる	1	0	1	2
接触頻度	毎日	20	4	13	37
	週 1 回以上	2	1	12	15
	月 1 回以上	0	0	2	2
	3 か月に 1 回以上	0	0	1	1
	それ以下	0	0	0	0

ネットワーク構成員の総数は合計 55 人で、その国籍はホストが 50.9%、同国人が 40.0%、他国人が 9.1%を占めていた。ネットワーク構成員がホストと同国人に 2 極分化するという結果は、横田・田中（1992）、田中（2000）と同様の傾向を示している。特にホストがネットワークの半数を占めるという点で、田中（2000）の結果と一致する。また横田・田中（1992）の結果を見ると、全体では同国人が選ばれる率ももっとも高かったが、欧米圏の留学生に限ればホストがもっとも多く選ばれており、本調査の対象者であるアメリカ人留学生と同様の結果である。Bochner et al（1977）など欧米圏での研究では同国人が選ばれる割合がもっとも高かったが、今回の調査では日本での先行研究を支持する結果となった。

構成員の他の特徴を見ると、数の上ではホストがもっとも多いが、満足度を見ると同国人がもっとも数値が高いことから、関係の親密さでは同国人が上回っていることが予想される。構成員と調査対象者との関係が、同国人は学内外の友人がほとんどであるのに対し、

ホストは教職員、学生、ホストファミリーなど多岐に渡っており、友人との関係において満足度が高いことも窺われる。学生と友人という関係は全国籍を合計すれば全体の 76.4% を占め、アメリカ人留学生のネットワークでは学内外の友人がもっとも身近で重要な構成員であることがわかる。接触頻度は毎日会う構成員がもっとも多く (67.3%)、頻度による親密化が予想される。

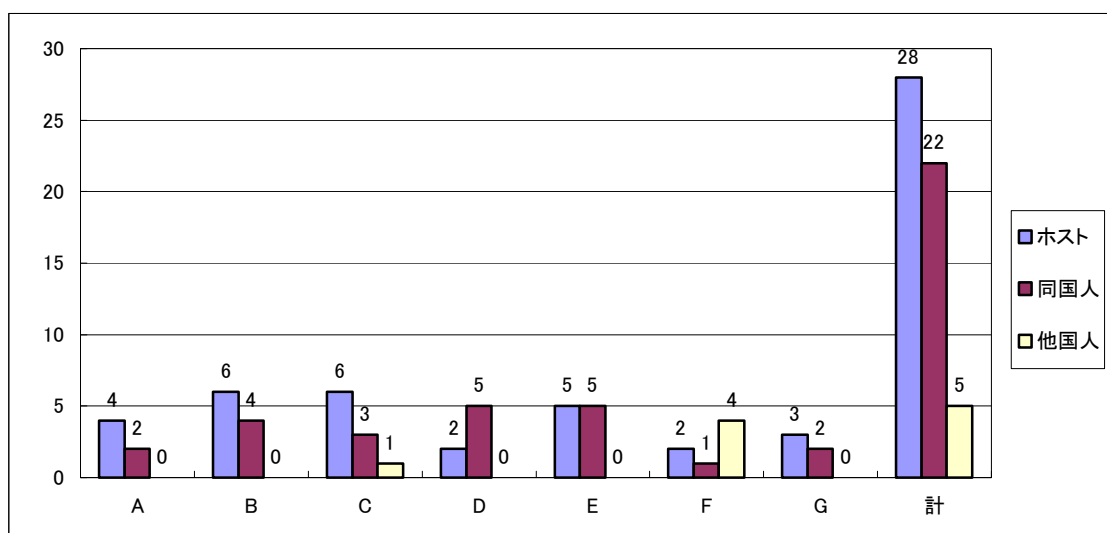
国籍別の数字を調査対象者ごとに表したのが、表 3 である。それぞれの国籍別の違いを分析すると、居住形態の違いが影響していることがわかる。国籍別でもっとも人数の多かったホストの内訳を見てみると、比較的ホストの数が多い A、B、C、E はホームステイをしており、比較的数が少ない D、F、G は寮に住んでいる。そしてホームステイをしている留学生は全員ホストファミリーを構成員に選んでおり、ホストのネットワークにおけるホストファミリーの重要性が感じられる。田中 (2000) にはホストファミリーは母国での家族のサポートを補償する存在であることが指摘されている。

また他国人を選んだのは C と F だけで、その他国人のほとんどが F の構成員である。F は交換留学生で留学生専用寮に住んでおり、毎日の生活や授業で他国の留学生と接触する機会が多いため、自然と多国籍のネットワークができてきたことが推測される。

一方寮生の中でも D はアメリカからの短期留学生の寮に住んでおり、ホストや他国人との接触が限られているためか、同国人の数が多い。

このような居住形態別の傾向は横田・田中 (1992) に見られた居住形態によるネットワークの違いとも一致している。表 2 の接触頻度でも毎日接触する人が選ばれている率が非常に高い (67.3%) ことから、毎日の生活を共にするクラスメイトやホストファミリー、寮生などと親密な関係を築いていることが想像される。

表 3 調査対象者ごとの国籍別ネットワーク構成員



4. 2 アメリカ人留学生とホストの親密化

インタビューデータの分析の結果、結果図 (文末に添付) にあるように留学生とホスト

の親密化に関して 6 つのカテゴリーを得た。図は留学生がホストと親密になるプロセスを表している。カテゴリーの中で中心となるコア・カテゴリーは<親密さの程度>で、【表面的な関係】から【親密な関係】まで段階的な親密化が見られる。ホストが【開放的】か【閉鎖的】かという<受け入れ度>は、ホストとの関係が築かれる以前の前提条件ともいうべきカテゴリーである。<つきあいの形態>は親密さによって【グループ行動】から【個人的な関係】へと変化すると考える。<親密化を促進する要因>と<親密化を阻む要因>は相反する機能によって親密化に影響を与えると考える。<サポートの種類>はそれぞれのカテゴリーはコアになる<親密さの程度>と有機的に関連し合い、親密化のプロセスを形成している。

4. 2. 1 つきあいの形態

つきあいの形態には大きいグループや小さいグループで行動する【グループ行動】と、1対1でつきあう【個人的な関係】があり、親密になるにつれグループが【個人的な関係】へと変化していく。

B は短期留学生が来日した当初は同国人とホスト混合の大きいグループで行動していたのが、親しさが増すにつれ小さいグループへと分かれていくことを指摘している。「まだみんな友達を作っていない状態では、大きいグループで一緒にいた。(略) 少し後になると、親しい友達ができ、個人的に『どこかに行かない?』と誘うようになる。そうすると 2, 3 人の親しい友達だけで行くようになる。親しい友達ができると、もっと親密なつきあいになる。」このようなグループには E-pal が同行している場合が多く、自分の E-pal だけでなく他の人の E-pal とも知り合うきっかけとなっている。

【グループ行動】と【個人的な関係】は、どちらか一方が選択されるというよりも、両方の形態が親密さによって使い分けられているようである。A は「僕はいつも 1 対 1 でつきあう」と述べながらもホストや同国人とグループ行動もしており、「友達とは個人的なつきあいをする」と述べているように、親密になった人とは【個人的な関係】を形成することを示唆している。留学生活のスタート段階では、留学生は知り合いがほとんど誰もいない状況から始め、少しずつ対人関係を形成していく。最初は特定の人だけでなく大勢の人と接触をして、その中から親しさを感じる人には個人的な接触を試みるのではないだろうか。留学生は【グループ行動】よりも【個人的な関係】を好む傾向がある(横田 1991b)と言われるが、今回の調査では個人的なつきあいとは別にグループでのつきあいも平行して維持しており、両方の形態の使い分けが見られた。

4. 2. 2 受け入れ度

受け入れ度とは留学生がホストとの関係を構築する前提条件とも言うべきホストの態度を指し、【開放的】と【閉鎖的】という相反する態度が指摘された。

横田(1991b)の親密化に関する研究では、留学生とホストの親密化を妨げている要因の一つに、お互いに相手が【閉鎖的】であると感じているという項目が高い値を示している。【閉鎖的】とは、ホストにとっては「グループ行動への不参加」という対集団的な意味合いを持ち、留学生にとっては「関係をつくりにくい」という対個人的な意味合いを持つ

と言う。つまりホストは留学生が自分達のグループに飛び込んでこないことを【閉鎖的】と捉え、留学生はホストがグループで行動していて【個人的な関係】になれないことを【閉鎖的】と捉えている。【個人的な関係】になることはくつきあいの形態>で見られたように、留学生にとっては親密度を測る尺度のように思えるだろう。ホストが【閉鎖的】だと感じるという意味は、ホストのグループが自分との親密な関係を拒んでいるように感じられると言い換えてもいいだろう。

Aはホームステイ先のコミュニティで地元の若者と接触する機会があったが、彼らと個人的な関係が作れないことを残念に思っていた。『今度遊びに行こう』と誘ったけれど、誰も行きたがらない。どうしてか分からない。僕はコミュニティに入りたいけれど、コミュニティは僕を必要としない」。学外ではホストファミリー以外に個人的な関係は築きにくく、Aはそれをソトの人間である自分が、コミュニティのウチのグループに受け入れられないためだと認識していた。

Eも学外では自分がホストのグループのソトにいるため、受け入れられていないと感じると述べている。「自分がグループのソトにいて、メンバーを誰も知らなくて、誰かと目が合っただけ『こんにちは』って言っても、人は自分をおかしいんじゃないかと思うでしょう？」ウチ・ソトというグループで親密さを区別するホストと個人レベルで親密化を図る留学生では、人間関係を構築する方法にギャップがあり、それが親密化を阻んでいることが窺われる。

一方学内の関係を見ると、ホストは【開放的】で接触の機会も豊富にあると認識されているようである。「この学校では（ホストと知り合うのは）とても簡単。皆話したがっているし、練習したいと思っているし、それにたくさんの機会があるし。PA²のようなクラス的环境とか、E-palとか、チューターとか、一緒に食事するとか、たくさんの機会があるので。いろいろな環境と日本人がオープンなのが、簡単な理由（C）」このように学内ではホストとの接触は多いと推測される。Dもホストと短期留学生のネットワークに参加して時間を共有することは簡単だと言う。「それは簡単。友達になりたい日本人はたくさんいるので、とても便利」。学内の環境は調査対象者のアメリカ人留学生にとって親密化を図るのに適した環境だと言えそうだ。これは学外と違い学内では、外語大学という特殊な環境がホストの留学生への関心を高めていることが一因だと思われるが、その関心が親密な関係を構築するための基礎にすぎないことも予想される。

4. 2. 3 親密さの程度

ではその<親しさの程度>はどのぐらいなのか。分析ではホストとの親密さは【表面的な関係】から【親密な関係】まで段階的な程度が見られた。E-palやチューター、Language Exchangeの相手との関係も、<親密さの程度>にばらつきがある。

DはE-palとの関係が表面的であることにストレスを感じていた。『こんにちは。元気？』というだけで、あまり話もしないし、何も共有するものがない。私は彼女と社交的に一般

² PAとはPerformance Activityの略で、ホスト学生をビジターに迎えて行うインターアクティブな教室活動を指す。

的な生活のことを話すだけ」。D はネットワーク構成員に自分の E-pal ではなく他の人の E-pal を重要な人物に挙げている。D とは対照的に B は自分の E-pal と来日前から帰国までずっと友好的な関係を保持していた。そして自分の E-pal や他の人の E-pal を通じてホストとの関係を構築していった。「日本人の友達全員 E-pal を通じて知り合った。E-pal と短期留学生はいつも同じ場所へ行く。他の短期留学生がそれぞれ E-pal を連れて来て、みんなで会う。それに E-pal の友達もいるし」。B は前述したようにこのようなグループ行動を重ねるうちに小さいグループへと規模を縮小し、自分の E-pal を含めた【親密な関係】を構築していった。

チューターとの親密さも留学生によって程度が違っていった。A はチューターとの関係が表面的で親密になるきっかけがないことを指摘している。「チューターとはやるべきことをして、どんな音楽が好きかとかありきたりの質問をして、全然個人的ではなかった。週に 1 回会うだけだし、外で何かするのは気詰まりに思えた」。A はチューターが制度的に自分に割り当てられて、チューター側に選択の余地がなかったことに親密さを阻む原因があると捉えているようである。「彼女は僕に割り当てられたみたいに思えた。彼女は僕を気に入る選択はなかった。彼女は自分のことを好きだと思うけれど、『コーヒーでも飲んで、もっと自分たちのことを話そうよ』と言うのは少し変な気がする」。その一方で E はチューターとの関係を「ただ勉強を手伝うというよりは、友達のレベル」と言い、【表面的な関係】を越えてお互いの個人的な話題を語り合う関係を築いている。A と E のような違いはお互いの相性の問題でもあり、制度的にペアを作ることの限界と可能性を示している。

Language Exchange のシステムもホストとの関係構築に積極的に利用されている。G は当初の数名から淘汰されて 2 名になった Language Exchange の相手と定期的会って、【親密な関係】を構築中である。G はその 2 名を重要な人物に挙げている。1 年の滞在期間の 3 分の 1 を終えた段階で、G はまだホストの友人と学外で会うほど親しいとは感じていなかった。「私はまだそれほど親しい人がいないから、もっとちょっとつきあってみて、多分来学期あたり、『ショッピングビルに行かない?』と誘うのが気まずくない頃に誘うかもしれない」。A も Language Exchange で数人のホスト学生と知り合っているが、学外で個人的に会うことはしないと述べている。「学外ではあまり会わない。個人的には、いつも SALC で会っている」。ただ A もその数人を重要な人物に挙げており、その関係は少なくとも表面的ではないと判断していることが推測される。

このように学内で知り合ったチューターや Language Exchange などとの関係では、学外に出て個人的に会うか否かは【親密な関係】に発展するかどうかの境界線ともいえる。特にチューターは日本語のサポートが主な目的と謳われていることもあり、決められた時間外に会ったり学外に出て行動したりするのは制度から外れると躊躇する気持ちがある。その出会いを親密な友人を作るきっかけとすることも可能であるが、自然な出会いと比較すると境界線は越えにくいのもかもしれない。

4. 2. 4 親密化を促進する要因

<親密化を促進する要因>とは一旦接触して関係ができた相手とさらに親密になるプロセスを進める機能を果たす要因である。B は E-pal との関係が深まるプロセスを、【接触頻

度】が高いことで説明している。短期留学生は E-pal と各種文化イベント³で顔を合わせる機会が度重なり、他のホスト学生と比べて親密になりやすい。文化イベントは新しいホストと知り合うきっかけを作っているというよりは、よく会う E-pal と親密化するのを促進する機能があると言える。

別の例では G は Language Exchange の相手との関係に触れ、【接触頻度】が高いので、チューターと比較すると関係がより親密であると言う。「(チューターより Language Exchange の相手)とはもっと頻繁に会うので、彼女とはもっとたくさん話すし、一緒にいて楽」。ただこの場合は B の場合と違いお互い自発的に会う回数を増やしているわけで、親密になったから会う頻度が高いのか、頻度が高いためますます親密になるのか判然とはしない。しかしながら両者が関連性を持っていることは推測される。

4. 2. 5 親密化を阻む要因

<親密化を阻む要因>については横田 (1991 b) に詳細があり、ここでは「留学生と日本人大学生の親密化を妨げている要因」を、心を許すことが出来る友人関係が築きにくい理由、と定義している。今回の調査では留学生とホストとの関係が親密にならない要因の 1 つに、自分とのつきあいが負担になるのではないかという【負担をかける不安】が見られる。G のインタビューでは、勉強やアルバイトなどで忙しいホストの時間を奪う心配をする発言が見られた。「(Language Exchange の相手)はアルバイトをしていて、かなりの時間働いているのを知っている。だから彼女は学外でそんなに暇じゃない」。前述の A もチューターと決められた時間外に会って話すことがチューターにとって精神的な負担になることを不安に思っていた。

ホストと親密にならない別の要因は、日本での【滞在期間の短さ】である。短期留学生は 1 学期から 2 学期間、交換留学生は 1 年間という期間を日本で過ごす。その間に親密な関係を構築するのは、大学進学希望者や学部留学生、大学院生と比べれば比較的難しいと感じられるであろう。F は自分が交換留学生であるため、ホストは早晚帰国する留学生と関係を構築することに魅力を感じていないという感想を述べている。「日本人と親密な関係を作るには時間がかかる。でも交換留学生は 1 年しかいないから、日本人にとっては交換留学生と友人関係になることに魅力を感じないと思う。多分少し危険なのかもしれない。というのはその人は相手が帰国することを知っているから」。横田 (1991 b) によると親密化とは関係のできる初期にある程度決まってしまう、留学生とホストとの親密化がスムーズにいかないのは、関係初期の活発な相互作用が起こりにくいことに起因している可能性があると言う。もし関係初期に親密化するか否かが決まる傾向にあるとすれば、留学生のこのような心配は杞憂だと思われる。

このように留学生はホストの事情や心情を推測し、果たしてホストが表面的な関係を超えて親しくつきあうこと望んでいるのか迷う気持ちがあり、積極的に一歩先へ踏み出せずに逡巡していることがわかる。

³ 短期留学生の留学プログラムに含まれるイベントで、日本文化を体験することを目的とする。E-pal はこういう文化イベントにも積極的に参加するよう期待されている。

親密さを阻むもう一つの要因に、ホストの【感情表現のなさ】が留学生に親しみを感じさせないという項目がある。D や F はホストとお互いの感情を共有できないことを親しくなれない原因と捉えていた。「私の1番大きい問題は、人が自分の感情を話さないこと。私は人がどう感じているか、どうやっているか知りたいし、自分がどう感じているか話したい。日本人の友達の何人かは自分の感情を話してくれるけれど、ほとんどの人は感情を表に出さない (D)」。「文化的な違いは大きい。僕達は自分の感情や意見をオープンにするけれど、日本人は違う (F)」。このようなホストの【感情表現のなさ】を指摘する視点は、異文化圏での対人コミュニケーション能力、つまり異文化間コミュニケーションの領域で取り上げられる問題の一つと考えられる。田中 (2000) では日本で対人関係を形成、維持する際の行動における困難を留学生に聞いており、ホストの「感情表現の抑制」が困難な項目の一つに挙げられている。そして対人関係を形成・維持・発展させるためには、異文化における行動様式を学習する異文化間ソーシャル・スキル・トレーニングが有効だとしている。今回の調査で出てきた【感情表現のなさ】という視点も、そのような方略で教育的な介入があれば親密化を促すことに繋がるかもしれない。

4. 2. 6 サポートの種類

田中 (2000) はソーシャル・ネットワークにおけるネットワーク構成員からのサポートが留学生の適応に有利に働くという「ソーシャル・サポート・ネットワークの異文化適応促進仮説」を、日本の留学生を対象に検証している。本研究では留学生がソーシャル・ネットワークからサポートを受けることが、ネットワーク構成員との対人関係形成・発展に貢献し、親密化にも影響を与えると考える。

サポートの種類には【日本語のサポート】、【生活のサポート】がある。サブカテゴリーの(サポートの性質)に関しては、【道具的なサポート】から【情緒的なサポート】へと親密さの程度に対応する動きが見られた。

サポートの機能に関する先行研究では、言語のサポートは主にホストが担うという結果が大半を占めている (Bochner et al 1977、Furnham & Alibhi 1985、田中 2000)。インタビューでもホストの日本語のサポートが有益なものと認識されており、そのサポート供給源はチューター、E-pal、Language Exchange の相手、ホストファミリーと多岐に渡る。

チューターからの日本語のサポートは、【道具的なサポート】に留まるケースと、それを超えた【情緒的なサポート】も伴うケースとが見られた。インタビューの中でチューターに対してどんなイメージを持っているかを尋ねたところ、「先生みたいな感じ (A)」、「多分リソース (G)」のように単に日本語を学習するための【道具的なサポート】と認識している留学生と、「ただ勉強を手伝うというよりは、友達レベル (E)」、「彼女は友達 (F)」のように友人関係に発展して【情緒的なサポート】もあると認識している留学生がいた。ホストからのサポートについては道具的な学業支援に限られると報告されているが (Bochner et al, 1977、田中 2000)、道具的な機能を超えた友人関係の中で【日本語サポート】を受けているケースもあることがわかる。

E-pal の【日本語のサポート】は、自分の E-pal だけでなくグループ行動によって知り合った他の人の E-pal たちからも受けていると推測される。B は来日当初に E-pal とのグルー

ブ行動の中で【日本語のサポート】を受けたと述べている。「自分の日本語はすごく下手だけど、彼らは英語が上手なので、とにかく話す。それが日本語の勉強にも役立った。彼らは日本語を教えてくれたから」。新生活支援という目的の E-pal から日常会話の中での【日本語のサポート】を得ているが、これは後述する【生活のサポート】に伴って提供されるものだろう。

Language Exchange では留学生は【日本語のサポート】を受けるだけでなく、自分の母語で相手の言語学習もサポートする。G は「(Language Exchange は) とても役に立つ。自分が聞きかじったことを質問したり、宿題を手伝ってもらったりする(略)彼女の宿題を手伝いたいと思っている」と Language Exchange の相手との相互の言語のサポートを評価している。またその関係がチューターと比較してより快適だと指摘する。Language Exchange はチューターや E-pal のように大学側が相手を決めるシステムではなく、本人同士の意味によって関係を維持していくかどうかが決まるシステムである。留学生は相手に自分に割り当てられたわけではなく、お互いのお互いという安心感がある。サポートの性質について言えば、この Language Exchange は【表面的な関係】に留まらず【親密な関係】に移行しつつあり、【情緒的なサポート】も伴ったものと思われる。

前述のようにホストファミリーは毎日の生活の中で接触する時間も長く、短期留学生にとって重要なネットワーク構成員と認識されている。ホストファミリーによる【日本語のサポート】は田中(2000)でも指摘されているように大きい比重を占めているようである。ホームステイをしている C は、誤解が許されない重要な情報は家族の中で英語が話せるメンバーと話すが、日常会話は家族全員となるべく日本語で話すと述べていた。A と E はホームステイ先では子供たちとの兄弟のような関係が、重要な【日本語のサポート】になっていると述べていた。

短期留学生への【生活のサポート】の提供には、新生活支援の活動である E-pal が大きな役割を果たしているようである。B は来日当初に遭遇した日常生活での困難が E-pal のサポートで軽減したと語っている。「レストランで注文する時や、携帯電話の契約を変える時自分1人では難しすぎたけれど、E-pal に頼んだら、電話会社に電話してくれて、必要なことはほとんど済んだ。日常生活がとても楽に過ごせた。特に最初の頃は」。そして来日後 3 か月経った現在では【生活面でのサポート】にさほど必要性を感じないことも述べている。「今はそれほどでもないけれど。というのは、日本語が上手になってくるし、日本でのやり方がわかってくるから」。E-pal やバディなどの新生活支援の活動は、留学生とホストが関係を構築する初期の段階で知り合う機会を与える。前述のように親密化は関係のできる初期にある程度決まってしまう(横田 1991b) ことから、この時期にホストが積極的に働きかけることで、母国の環境から切り離され不安定な心理状態にある留学生は緊張感を解いて円滑な対人関係構築ができるのではないだろうか。

5. まとめと実践への示唆

今回の調査対象者であるアメリカ人短期留学生・交換留学生のソーシャル・ネットワークの調査では、ネットワークにおけるホストの割合が半数を占め、難しいと言われるホストとの関係がある程度構築されていることがわかる。但し満足度においては同国人のほう

が高いことから、ホストとの親密さはアンケート調査からは判断できない。

インタビュー調査ではホストとの親密化に焦点を絞り、その親密さの程度と親密になるプロセスに明らかにした。留学生とホストとの親密さの程度にはばらつきがあるが、表面的な関係だけでなく、親密になりつつある関係から親密な関係までであることがわかった。

親密さに影響を与える要因を考えると、まず接触頻度が高い人と親しくなりやすい傾向がある。ホストファミリーは毎日接触し、日本語や生活のサポートを与え、留学生の情緒的な拠りどころとなっている。毎日の生活を共にすることで、異文化体験を重ねながらもお互いに理解し合い親しくなっていくという過程を経る。またイベントや学内で頻繁に接触する E-pal とは、割り当てられたペアの関係だけでなく E-pal のネットワークとのグループ行動を通じて、親しくなった人との個人的な関係を構築していく。

親密さへの影響でマイナスの要因に、滞在期間が短いことがある。これは留学生の意識の上での影響で、ホストはすぐに帰国することがわかっている人間とは親密になりづらいと、留学生は推測し親しい関係の形成を躊躇している。しかし親密化するか否かは関係初期に決定されるという説もあり、時間をかければ親密になるというわけでもなく、留学初期から積極的に接触の機会を利用する中で親密になれる人を得ていくことが必要である。

ただ接触の機会は支援制度などを通じて多く存在するにもかかわらず、今一步親密になれない理由に、支援制度でペアになったホストへ負担をかける不安がある。ペアの相手との関係がたとえ表面的にうまくいっていても、制度的に割り当てられたという負担感がホストにあるのではないかと、留学生は関係発展に対して消極的になっている。この結果から大学側が制度的にペアを作り支援活動を行なうことの難しさが見える。単に相性が良くないというだけではない問題が潜んでいることが窺える。チューターの場合も 1 対 1 の関係だけでなく、E-pal のようにグループ行動で接触できる機会を作ればこのようなマイナスの影響も薄まるのではないだろうか。

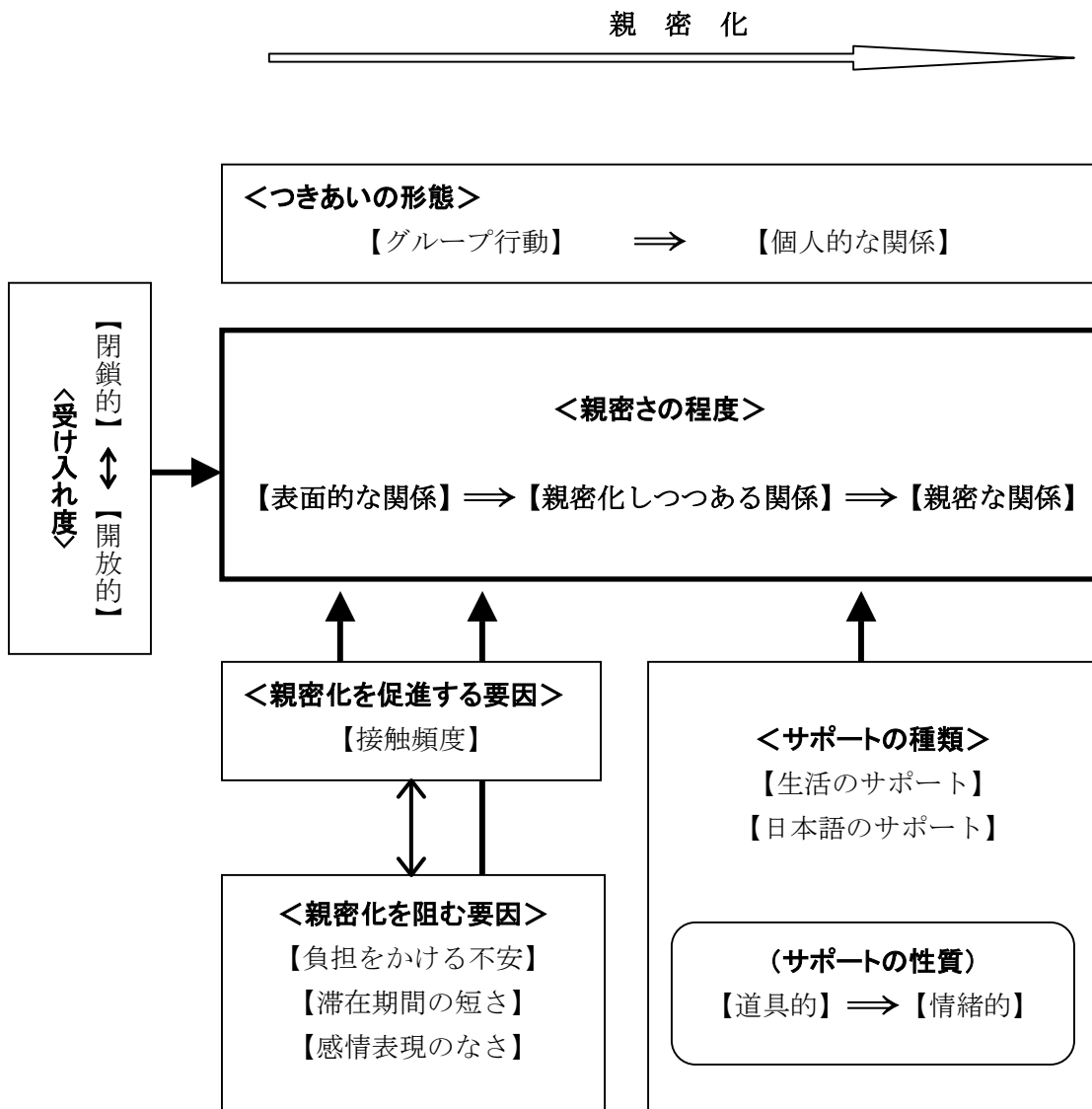
学外に比べてホストが開放的な学内の環境は、支援制度による接触の機会もあり受け入れの体制はかなり整っているといえるだろう。しかし留学生がホストとの 1 対 1 の個人的で親密な関係を構築するには、上記のような要因に加え、異文化間コミュニケーションの問題を考慮することが必要だろう。異文化圏における行動様式を学習し適応を促進する異文化間ソーシャル・スキル・トレーニング (Furnham & Bochner, 1986、田中 2000) や、異文化環境下で適応する能力である異文化間能力 (山岸・井下・渡辺 1992) の養成などの教育的介入が有効な手段として考えられる。アメリカ人留学生という文化的背景をもった対象者への実践的な異文化トレーニングの研究が望まれる。

また本研究は留学生側からホストとの親密化について分析したが、今後はホスト側から見た留学生との親密化に関する視点も入れて、双方向の期待や捉え方の違いも分析することが課題となる。

参考文献

- Bochner, S., McLeod, B. M., & Lin, A. (1977). Friendship patterns of overseas students: A functional model. *International Journal of Psychology*, 12, 277-294.
- Furnham, A., & Alibhai, N. (1985). The friendship networks of foreign students: A replication and extension of the functional model. *International Journal of Psychology*, 20, 709-722.
- Furnham, A., & Bochner, S. (1982). Social difficulty in a foreign culture: An empirical analysis of culture shock. In S. Bochner (Ed.), *Cultures in contact: Studies in cross-cultural interaction* (pp. 161-198). Oxford: Pergamon Press.
- Furnham, A., & Bochner, S. (1986). *Culture Shock*. London: Methuen & Co. Ltd.
- 木下康仁 (2003) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』 弘文堂。
- 工藤和宏 (2003) 「友人ネットワークの機能モデル再考ー在豪日本人留学生の事例研究から」 『異文化間教育』 18号、95-108頁。
- モイヤー康子 (1987) 「心理ストレスの要因と対処の仕方ー在日留学生の場合」 『異文化間教育』 1号、81-97頁。
- 長田厚樹 (2003) 「大学間協定の積極的展開と学内の国際化」 『留学交流』 第15巻9号、18-19頁。
- 田中共子 (2000) 『留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル』 ナカニシヤ出版。
- 山岸みどり・井下理・渡辺文夫 (1992) 「「異文化間能力」測定を試み」 『現代のエスプリ：国際化と異文化教育』 229号、201-214頁。
- 横田雅弘 (1991a) 「自己開示から見た留学生と日本人学生の友人関係」 『一橋論叢』 第105巻5号、57-75。
- 横田雅弘 (1991b) 「留学生と日本人学生の親密化に関する研究」 『異文化間教育』 5号、81-97。
- 横田雅弘・田中共子 (1992) 「在日留学生のフレンドシップ・ネットワークー居住形態（留学生会館・寮・アパート）による比較ー」 『学生相談研究』 13号、1-8頁。

結果図 留学生とホストの親密化



< > : カテゴリー

() : サブカテゴリー

⇒ : 親密化の過程

↕ : 相反する概念・カテゴリー

【 】 : 概念

□ : コアカテゴリー

↑ : 親密化への影響